

聖書：ルカ 22：24～30

説教題：給仕する者のように

日時：2012年12月30日

弟子たちは「この中で誰が一番偉いだろうか」と議論しています。彼らはこれまでも繰り返してこの議論をして、イエス様に戒められてきました。この時はイエス様が十字架にかかる前夜でした。イエス様は特別な思いで最後の晩餐の用意をし、初めての聖餐式を制定されました。弟子たちと過ごすことができる最後の夜として、貴重な交わりの時でした。なのに彼らはまた、この議論を始めてしまった。その発端となったのは、直前の23節でしょう。裏切り者の予告を聞いて彼らは、「そんなことをしようとしている者は、いったいこの中のだれなのか」と議論し、「私ではない」「私ではない」と互いに言い始める間に、自分はこれまでどんなに立派にやって来たかという話になり、いつしか「では誰が一番偉いか」という話に移って行ったのでしょうか。これは彼らだけの問題ではなく、私たちの姿の写しでもあるでしょう。そんな彼らに、イエス様は25節から語って行かれます。

まず25節と26節：「すると、イエスは彼らに言われた。『異邦人の王たちは人々を支配し、また人々の上に権威を持つ者は守護者と呼ばれています。だが、あなたがたは、それではいけません。あなたがたの間で一番偉い人は一番年の若い者のようにになりなさい。また、治める人は仕える人のようでありなさい。』」ここでイエス様はこの世の考え方と、神の国の考え方の違いを、対比して述べています。「異邦人の王たち」とは、この世の一般の王様たちのことです。その人たちの治め方は、一言で言って「上から支配する」というものです。王としての立場や権力を使って、人民を統制する。その人々は「守護者」と呼ばれている、とあります。王様と言えども、自分の好き勝手に権力を使ったら、すぐに反乱や暴動が起こって、その国は立ち行かなくなります。ですから王はある程度、人々が喜ぶようなことも行なうのです。そうして人々に自分の力を感じさせ、ありがたさを印象づけて、上からの支配を正当化するのです。分かりやすい例で言うと、ある人が総理大臣になると、その地元の益につながる政策をすることがあります。すると地元の人は大喜びし、その人を神様呼ばわりします。この人は私たちの「守護者」だと言うでしょう。このようにしてこの世の王は高い所に立って自分の権力を見せつけ、人々に自分をあがめさせて、人々を治めるのです。

しかし、あなたがたはそれではいけません、とイエス様は仰います。まずイエス様は「あなたがたの間で一番偉い人は一番年の若い者のようにになりなさい。」と言います。年上の人は、年下の人に対して、自分の方が上位にあるということを相手に感じさせて何かを言ったり、命令することができます。反対に年下の方は、年上の人に道を譲ったり、嫌な仕事、面倒な仕事を自ら引き受けることが期待されたりします。しかしイエス様は偉い立場にある人こそ、年若い者のようにになりなさいと言われたのです。

もちろんこれは、若い人が年上の人を批判し、自分たちに仕えてくれることを要求するための御言葉ではありません。聖書には「あなたの父と母を敬え。」とありますし、レビ記 19 章 32 節に「あなたは白髪 of 老人の前では起立し、老人を敬い、またあなたの神を恐れなければならない。わたしは主である。」とあります。目上の人たちはそれだけで、尊敬を受けるにふさわしい人たちであると主なる神様が言うておられます。ただ今日の箇所では、上にある者たちは、だから自分たちはもっと敬われてしかるべきなのだ、だからあなたがたがもっと仕えなさい、という態度で人にアプローチするのではなく、まるで自分が年若い者であるかのようになりなさい、とされているのです。また治める人、すなわち指導者も、自分はその立場にあるのだから、あなたがたはこれこれのことをしなさい、と上から指導するのではなく、まるでその立場にない人であるかのように、その反対の仕える人であるかのように人に接し、行動することを通して、真のリーダーシップを発揮しなさい、とされているのです。

27 節も同じです。イエス様がそこで仰っているように、食卓に着く人の方が普通は偉い。食べ物を用意して運んで来る人よりも、テーブルに着いて待っている人の方が、力関係において上であると見られます。また実際にそういう関係にあるなら、そうすることはその人たちにとっておかしいことではありません。しかしだからと言って、上の立場にある人は、これは私の特権である、とただ座って満足しているべきではない。イエス様は「しかしわたしは、あなたがたのうちにあって給仕する者のようにしています。」とご自身の姿を示されます。おそらくこの言葉と関連して、あのヨハネ 13 章の、イエス様が弟子たちの足を洗われた出来事があったと思われまゝ。誰もしたいとは思わない「人の足を洗う」という仕事を、イエス様がたらいに水を入れ、手ぬぐいを腰にまわって行なわれました。イエス様は言われました。「わたしがあなたがたに何をしたか、わかりますか。あなたがたはわたしを先生とも主とも呼んでいます。あなたがたがそう言うのはよい。わたしはそのような者だからです。それで、主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。」 イエス様はいつも、ご自身が当然受けて良い特権をご自身のために用いず、かえって年若い者のように、低い者であるかのように、仕えて歩まれました。そこにご自身のリーダーシップはどのようなものであるかを示して下さいました。そしてその究極が十字架の死です。マルコ 10 章 45 節にありますように、イエス様は仕えられるためにではなく、かえって仕えるために私たちのところに来てくださり、私たちの贖いの代価としてご自身のいのちさえも与えて下さいました。私たちはここに神の国で真に偉い人とはどんな人なのか、治める人はどのような人でなければならないのか、永遠の模範を繰り返し見て行かなければならないのです。

最後 28～30 節は、このようなイエス様に倣って歩む者への報いについてです。28 節に「わたしのさまざまの試練の時にも」というイエス様の言葉があります。常に給仕する者のように歩まれたイエス様の生涯には、「さまざまの試練の時」と呼ばれる時があったのです。人に仕え、低い立場を取るために、人々から見下されたり、無関心の扱いを受けたり、格好悪かった

り、みすぼらしかったり、辛い経験を強られる時があったのです。弟子たちはそんなイエス様について来ました。イエス様はそんな彼らへの祝福を宣言しておられます。これは特別なことです。なぜなら弟子たちはこの夜、イエス様から逃げて行く人たちだからです。にもかかわらず、イエス様はただあわれみによって、弟子たちがこれまでご自身の名においてなして来たことをしっかり心に覚えて下さっているのです。これまでもたくさん失敗をし、これからも大変な失敗をするからと言って、それらの歩みを帳消しにはなさらない。イエス様はご自身のための私たちの奉仕をよく記憶して下さり、やがての神の国で豊かに報いてくださるというのです。このことを覚える時、私たちはイエス様のための働きをなすことにおいて何と大きな励ましを与えられることでしょうか。

その報いについて 29 節にこうあります。「わたしの父がわたしに王権を与えてくださったように、わたしもあなたがたに王権を与えます。」 また 30 節にはやがての御国でイエス様の食卓について食事をする事、また王座についてイスラエルの 12 の部族をさばくことが言われています。この「さばく」という言葉は「治める」ということと同じです。つまりこの世で仕える歩みをした彼らには、やがて 12 部族を治める特権が与えられる。これはどういう意味でしょうか。地上で仕えた彼らは、天国では胸を張り、今度は偉い人として威張りながら治めるということでしょうか。イエス様の場合もどうでしょうか。イエス様はこの世で仕える者として歩まれましたが、天国では威張りながら、「もうわたしは仕えることはしませんよ！今度はみんなに仕えてもらうよ！」と言って、上から治めるのでしょうか。そうではないでしょう。イエス様の治め方はこの世にあっても天の御国でも一貫して変わることがありません。本来はこのイエス様の姿に倣って「仕える」という生き方をするこそ、神のかたちに造られた人間の本来の生き方でした。ところが人間は罪を犯し、自分中心になって、人に仕えるより、より多くの人に仕えてもらうことが偉いしだと考えるようになった。今でも私たちはそのような考え方からなかなか抜け出すことができません。自分がどれくらい高い位置にあって、どれくらいの人々を従わせる人間であるか、を誇ろうとするのです。しかし天国にそういう考えはない。言い換えれば、私たちが自己中心的な生き方から、他者に仕える歩みを基本とする者へ変えられて行くことが、救われて行くということなのです。

しかしある人はこう思うかもしれません。この世で仕える歩みをして、天国でもまた仕える働きを与えられるのでは、あまり嬉しくない。聖書の他の箇所にも、この世で神に忠実に歩んだ者に対するやがての報いは、さらなる奉仕であることが示されています。これでは天国にならないのではないか？天国は疲れる場所なのか？しかし心配ご無用。私たちが天国で頂く体は、疲れることを知らない強い体です。風邪を引いたり、けがをしたり、睡眠を必要とする弱い体ではありません。いくら仕えても全く疲れな強い体を頂くのです。そして天国での仕える生活は栄光あるものです。この世では低く仕える歩みは、人々に評価されず、無視され、あざけられたりするでしょう。しかし天国は皆が仕える歩みの素晴らしさを心から知り、評価する世界です。そういう御国で、仕える働きを与えられることはこの上ない特権であり、真に名誉な

ことです。疲れない体を与えられているのに、仕える働きを与えられない方が悲惨です。

このような将来に対する展望は、私たちの今ここでの歩みをも変革させるものでしょう。なぜならこの地上での仕える生活は天国の生活につながっているからです。それは人間の本来の生き方に進んで行くことであり、自分が救われて行くということだからです。私たちは今の地上の歩みを、そのような視点で捉え直したいと思います。万人祭司という言葉がありますが、私たちはキリストにあって、福音を語る万人預言者であると同時に、主のご支配を広げる万人王としても歩みます。私たちはどのようにして王としての歩みをするのでしょうか。覚えるべきは、仕える歩みをする時、私たちは王として歩んでいるのだということです。たとえば主婦の人たちも、食事を作ったり、子供の世話をしたり、色々仕えています。その時に思うべきです。私は今、王様をしているのだ！このように仕えることによって、キリストの支配を拡げる王様として歩んでいるのだ！と。今日の礼拝後の昼食会の時も、給仕する者と給仕される者のどっちが王でしょう。イエス様によれば、真の意味では、それは仕える側の方です。だからと言って、礼拝後に皆で一斉に台所にかけて、「私が王様」「私が王様」と争わないでいたきたいと思います。そういう場合は状況を見て譲るのも王様でしょう。その他、掃除をすることも、人がしたくないと思う仕事を率先してすることも、顧みられていない人に心を留めて関わることもそうです。このように考えると楽しくなってきます。嫌な仕事がそうでなくなって行く。みじめに見える仕事の実が栄光の働き、王様の働きだと見えて来る。そしてその取り組みは御国での生活につながって行くのです。

まことの王であるイエス様は言われました。「あなたがたの間で一番偉い人は一番年の若い者のようにになりなさい。」「治める人は仕える人のようでありなさい。」「わたしは、あなたがたのうちにあつて給仕する者のようにしています。」 真の偉大さは権力と名声を得て、上から人を動かすことにあるのではなく、仕える歩みにあります。そうして互いに仕えることを喜びとする教会の歩みに、この世とは異なる神の国の栄光が現わされて行きます。そしてそのように仕える歩み続けて行く者に、主は御国でさらに仕える特権、永遠に主と共に治める栄光を与えてくださるのです。